

令和元年度第1回清瀬市総合教育会議

令和元年度第1回清瀬市総合教育会議が令和元年5月24日午後1時30分に招集された。出席委員、議事の概要は次のとおり。

- | | |
|----------|---|
| 1 日 時 | 令和元年5月24日（金）午後1時30分から |
| 2 場 所 | 健康センター第3会議室 |
| 3 出 席 者 | 渋谷 金太郎（清瀬市長）
坂田 篤（清瀬市教育委員会教育長）
宮川 保之（教育長職務代理者）
粕谷 衛（教育委員）
兵頭 扶美枝（教育委員）
土屋 佳子（教育委員） |
| 4 事 務 局 | 今村 広司（企画部長）
石川 智裕（教育部長）
南澤 志公（企画課長）
細山 克昭（教育総務課長） |
| 5 オブザーバー | 長井 満敏（教育部参事） |
| 6 書 記 | 島崎 節子（教育総務課） |

議事日程

1. 開会
2. 協議事項
 - (1) 次代を生き抜く子どもたちに不可欠な資質・能力を育てる教育の在り方
 - (2) その他
3. 閉会

開会

渋谷市長が開会を宣言

(渋谷市長)

皆さん、今日はよろしくお願ひします。昨年は「21 世紀を生きる子どもたちを育むために、われわれ行政は何をすべきか」をテーマに学校教育、生涯教育のステージにおいて、効率的、効率的に、運用可能な組織形態はどのような形が理想なのかということをお議論していただきました。現在、われわれを取り巻く社会情勢や情報環境が目まぐるしく変化しています。こうしたことから、今回は「次代を生き抜く子どもたちに不可欠な資質・能力を育てる教育の在り方」をテーマとして設定しました。それではこれから坂田教育長に進行をお願ひします。

(坂田教育長)

会議が始まる前に、4 月 1 日から新しい教育委員をお迎えいたしました。土屋佳子委員です。委員の皆さんからも自己紹介をお願ひします。

(土屋委員)

土屋佳子です。現在、日本社会事業大学の学長プロジェクト室に所属しております。社会福祉士です。専門はスクールソーシャルワーク、教育福祉です。坂田教育長とは東京都生涯学習審議会の審議員でご一緒した縁があり、今回教育委員をお引き受けした次第です。どうぞ、よろしくお願ひいたします。

(兵頭委員)

兵頭でございます。清瀬で校長をさせていただいて、本当に清瀬が大好きなまちになって、また教育現場に少し関わられるような、こういう形で委員をさせていただいて、本当に勉強させていただきます。また今年度もよろしくお願ひいたします。

(粕谷委員)

粕谷です。本年度もよろしくお願ひいたします。

(宮川教育長職務代理者)

宮川です。2 期目、1 年と数カ月です。まだ十文字学園女子大学に椅子を置いております。渋谷市長には清瀬市と大学との関係でもさまざまなご配慮をいただき、本当にありがとうございます。

(坂田教育長)

清瀬が8年目になりました。最近、この立場になって清瀬市に、教育委員会に、何か貢献出来たのかなと考えることがあります。時々それが見えなくなったときに、渋谷市長にも声かけをさせていただいています。そのような時はちょっと私の中で迷っている時だにご理解くださり、ぜひお時間取っていただきたい、よろしくをお願いします。

今日は渋谷市長からお話があったように、テーマを「次代を生き抜く子どもたちに不可欠な資質・能力を育てる教育の在り方」と教育委員会で設定しました。

問題提起です。われわれの目の前で学ぶ5,600人の子どもたちがいます。その子どもたちは、20年後、30年後の社会を生き抜いていけるだろうかということを申しました。市長にもこの議論を聞いていただいて、また渋谷市長のお話も伺う中で、われわれが何をすべきかを見つけていきたいと思えます。

これから日本の社会がどのように変わっていくのか。本当に貧しい知識の中で私の中でまとめてみました。未来は自動運転車が町中を走り回り、国際化がますます進み、世界の人と関りながら生きている。情報化が進み必要なときに必要な情報が取り出せる、人工知能が発展して仕事が変わってくる、このような時代になるはずで、目の前で学ぶ5,600人の子どもたちが社会の中核になる20年後、30年後は、たぶんこれまでのわれわれが歩んできた歴史とはまた違う、延長線上にはないようなことがたくさん起きるのではないかと予測をしているところです。

もう少し詳しく具体的にご説明をしますと、スカイドライブ(空飛ぶ車)です。もう実用化が目の前だという情報です。次はジェミノイドというアンドロイドです。全く人間と同じような形をしたアンドロイドが日本国内の数か所で実際にホテルでの受付業務についています。もう一つご紹介したいのは、日本でもすでに稼働している無人のコンビニです。技術がどんどん進んでいくことによって、職が失われたり、新たな職が生まれたり、このような世の中を子どもたちが生きていかなければならないわけです。私は教育にはすごく大きな責任があると思うのです。

今、科学技術者の中で語られているシンギュラリティ(技術的特異点)という単語があります。まずは、2018年開設された青山学院大学シンギュラリティ研究所の商業PVを見ていただきたいと思えます。AIが開発するAI、人工知能が進むことによって、社会が全く変わってきてしまうというような話です。そういう時代がもう目の前だという話ですね。2045年にはこうなるだろうという将来予測がある。その真ただ中、社会の中心で活躍しなければいけない彼らにはどのような力が必要なのかということです。これが今日の一番の議論の中心になります。

計算が速く正確に解けるとか、漢字がたくさん読み書きできるとか、リコーダーを楽譜通りに正しく演奏できるとか、歴史の年代をたくさん覚えているなど、正解を正しく導き出すことができる力の代わりに、考えたり、判断したり、表現したり、学び続けたり、豊かな人間性が重要になるのではといわれています。これは専門用語で非認知能力と呼びます。清瀬

で生まれ育ち、生活をしてきた子どもたちに、特に身に付けさせる資質・能力は何だろうかということを考えました。

ここで一つたたき台としての提案を行います。「故郷清瀬を誇りとし愛する心」、これを一番ベースに置いて、「自分で考え判断し行動する力」、「学び続け成長し続ける力」。この3つを提案したいと思っています。後ほどまた渋谷市長をはじめ、委員各位の意見も聞きたいと思います。これが今日明確にしたい一点目です。

もう一点は、これらの資質・能力をどのように育てれば良いかです。一例を見ていただい
てご意見をお願いしたいのですが、清明小学校が取り組んでいるESD教育です。これは持続
的可能な社会の担い手を育てている教育といわれています。清明小学校の「下宿囃子（した
じゅくばやし）」地域の伝統、郷土芸能を4年生の子たちが守り続けています。ESD教育に
ついて解説となる動画がありますので皆さんに見ていただきたいと思います。

<動画視聴>

（坂田教育長）

これは環境省が作成したESD教育の商業ビデオですが、2002年に国連が持続可
能な開発のための教育の10年を提案し、2005年から2014年までの10年間をESDの10年
とすることが国連で採択されました。地域の資源を使いながら、子どもたちが考えたり、行
動したり、発表したりします。清瀬にはたくさんESDに必要な有効で誇るべき資源がありま
す。それを学習の材料に使って、子どもたちの考える力、実行する力、それから協力する力
など、21世紀にどうしても必要な力を身に付けさせていこう、未来を作る人づくりとい
うのがESD教育の考え方です。

もう一つ提案をしておきます。それはアントレプレナー教育という起業家教育です。これ
も清瀬の資源を活用し社会の仕組みを知り、清瀬を誇りとする心を育て、自分で考え、行
動できる、また学び続け、成長し続ける人になるという、これがコンセプトです。板橋区立
企業活性化センターが主催した板橋区新春子ども起業塾の様子を動画で見いただけます。
これから見ていただくものも、学校教育の場ではありません。セルフウイングという会社で
子どもたちが会社を経営する模擬体験の授業です。プログラムを通じて身に付けるのは、チ
ャレンジ精神、コミュニケーション力、想像力、行動力、勤労観ですが、5つの力は資質・
能力です。銀行から資金を借りる場合にも、事業計画と返済計画が必要なこと、そして借用
書がないから追返されてしまうなどは、子どもたちが社会とつながった瞬間となりました。
社会の仕組みを学ぶだけではなくて、社会と実感してつながった。これは国語の授業でも、
社会の授業でも、算数の授業でもなかなかできることではなくて、このようなプログラムが
あるからこそなんです。これも今お話があったように、チャレンジ精神や責任感、さまざま
な資質・能力を高めていくプログラムです。

最後に見ていただく動画は、実は清瀬はこんな子どもを育てたいという思いです。1992
年の国連環境開発会議（地球サミット）で行ったリオの伝説のスピーチといわれています。
セヴァン・カリス・スズキさんカナダ在住の当時12歳の女の子です。ぜひ聞いていただき

たいと思います。おそらく非認知能力、資質・能力を磨くと、セヴァンさんのような子どもが育っていくというわれわれの目標でもある姿です。

<動画視聴>

(坂田教育長)

理想は高いですが、こういう子どもを清瀬が育てる。これを目指す清瀬の教育でありたいと思っています。

論点の1は、「清瀬の子どもたちに必要な資質・能力は何か」論点の2は、「どのような教育活動を行えば、この力が身に付くのだろうか」2つ目の例示が、地域の題材を活用したESD教育を推進することにより、郷土愛、考え、行動する力、学び続ける力を育むことです。繰り返しますが、地域の題材は清瀬の非常に優れたものをたくさん持っています。今までこれを十分生かし切っていませんでした。それがESD教育という枠組みの中で生かせるなら、この資質・能力を高めることができると、私は確信しています。

地域の資源を活用して、起業家教育に取り組み、ふるさと清瀬と社会の仕組みを知るとともに、社会の一員としての自覚と行動力を育てる。地域の資源はたくさんあります。研究所、介護施設、起業家教育もやっていくだけの資源を持っていると思っています。

今日はこの2つの議論ができて、一定程度渋谷市長と意思を一つにすることができれば、それを教育の現場で生かしていきたいと思っています。

ではまず本日の論点1から、委員各位のご意見を伺い、最後に渋谷市長からコメントをいただきたいと思います。

(土屋委員)

セヴァン・スズキさんですが、こちらの心が震えるようなスピーチでした。私は仕事柄、困難を抱えた子どもたちと向き合うことが多いのですが、スピーチの中の、ストリートチルドレンの話「その子は何も持っていないのに、シェアする心を持っている、しかし大人の人たちはどうか」という問いかけは大きいと思いました。

本日の論点1にある、ふるさと清瀬を誇りとし愛する心をベースに、その上に自分で考え、判断し、行動する。あるいは学び続け、成長するということは、これは大人であっても通用する話だろうと思いました。出来る限り幼いときからこのような力を育むことはとても必要だと思います。

震災後の福島県でスクールソーシャルワーカーとして支援活動をしていた時に気づかされたことですが、被災した人たちが失われた祭りや伝統芸能を復活させたい、この地でその伝統を核にして、いろいろな人が集まってもう一回祭りをやろうという思いには力がありました。ふるさとを誇りとし、自身で考えて行動することの大切さを、目の当たりにしましたので、なおさら深く感じ入るところです。

(坂田教育長)

今のお話ですが、これは大人になっても通用する資質・能力であり、できれば清瀬の人たちみんなに学んでいただきたいということ、地域、郷土、ふるさと清瀬の部分ですね。これは例えば伝統芸能というのは、地域の象徴であって、激動する世の中だからこそ、寄って立つ、地域というものを大事にするべきとのご主張であるというふうに解釈しました。粕谷委員はいかがでしょう。

(粕谷委員)

土屋委員のご意見に賛同します、清瀬の子どもたちに不可欠な資質、能力が何かということ考えると数限りなく、あつて困る能力というのはないのですが、たった1つをとったときには何なのか。あくまでも個人的な意見になりますが、他者を思いやる能力その一点と思います。

個人個人が、自分だけではなく、少しでも他者を思いやる気持ちを持っていれば、必ず助けてくれる人がいるわけです。行動することにおいても自分で考え、判断する力がなければできないと思います。

(坂田教育長)

思いやる気持ち、心に通じる部分かもしれないですね。力というようなものよりも、何か思いやりとか、相手を尊重するとかというのは、これは心の動きだから、もしかしたらこういう「故郷清瀬を誇りとし愛する心」これを一番ベースに置いて「自分で考え判断し行動する力」「学び続け成長し続ける力」の三項目に、「他者を思いやる心」の4つで構成ができるかもしれない。上が力で、愛する心と思いやりという構成ができるかもしれないですね。粕谷委員のご意見の部分ですが、清瀬には不足しているところのご指摘とも思われましたが。

(粕谷委員)

いろいろな意味で余裕のない方が、もしかしたら多い地域なのかと感じることはあります。

(坂田教育長)

余裕がないがゆえに、他者をおもんばかることが難しくなっている。兵頭委員、土屋委員、粕谷委員のお二人の意見を聞いた上でのご発言をお願いします。

(兵頭委員)

土屋委員がご意見に取り上げられていたセヴァンさんのプレゼンテーション力というのは、自分の考えをしっかりと持っているからこそ、これだけ説得力もあり、皆さんの気持ちを揺さぶるのだらうと思います。学校の教育現場では、子どもが自分の主張を行える場を作っていく必要があります。学びたい意欲が根底にあること、今は誰でも簡単に知識を得られる時代なので、その意欲という心の面の充実が大事だとプレゼンテーションを見て思いました。

「故郷清瀬を誇りとし愛する心」「自分で考え判断し行動する力」「学び続け成長し続ける力」三つの提案もとても大切なことと思います。冒頭で坂田教育長からお話があった激変する社会に対応するには、自分自身が学び続け、成長し続ける力が必要となります。

ESD 教育の中で、持続可能な社会の担い手を育てると説明がありました。児童や生徒自らが社会の担い手となる意識や自覚が必要と思いました。

学校が改めて取り組みを始めなくても、これまで実施していたもの、意識されていなかったことを、整理したり価値付けたりすることで、ESD の枠組みで捉えることが可能かと考えます。

(宮川教育長職務代理者)

私は清瀬第五中学校の教育目標にすごく着目しています。一つ目は、チームで働く力を身に付けさせよう。二つ目は、考え抜く力を身に付けさせよう。三つ目は、前に踏み出す力を身に付けさせよう。この三つです。これは今までの教育の側面をちゃんと貫いている。これからの時代に生きる子どもたちにとって必要な力をどう育てるか、小中学校間で共有することが、質も内容も高めていくことになるのではと思います。

兵頭委員がおっしゃった ESD の観点で、整理、価値付けし、また、土屋委員のご意見のとおり郷土愛をベースにし自分で考え判断し行動すること。学び続け成長するというのは、大人にも必要な力だといえます。彼らが大人になってこの街で本当に頑張りたいと思えることが必要だと思います。

地域を盛り上げよう、清瀬の魅力を感じてほしいとの思いから、渋谷市長が大学と連携して女子サッカーの大会を実施している事もその目的だと思います。

粕谷委員がおっしゃった本当に日々の仕事に精一杯であっても、1 日数分でも、この街の子どもたちのことを考える。そのような清瀬の文化を大人が育むことが必要と考えました。

ESD 教育やアントレプレナー教育などを実践し、子どもたちがこれから生きていくのに本当に必要な力を、清瀬の小中学校は身に付けさせようとしている。それならば市民としてそれを応援する必要があり、これは大人としての責任であります。このことが市民の皆さんの中に認識されることによって、この清瀬が我がまちになるのではと思います。

ぜひ渋谷市長からも「市民の皆さん、もっと子どもたちに目を向けましょう」「子どもたちの力を、もっと引き出してあげましょう」と発信していただきたい。

三つの提案については、私も同意をしています。このまちで育ち、このまちで学び、このまちで生活していることが、行き詰った時に自分の支えになるでしょう。それこそが渋谷市長がおっしゃった超自我の一部で、清瀬を誇りとする、愛する心だろうと私は思います。

(坂田教育長)

これから機械がどんどん人間の生活に浸透していく中で、心が折れそうになったときに、帰って来られる場所があるということが、私は一番大事だと思います。それがふるさととい

うものであって、そこをなくしてしまったら、どんなに文化・文明が発展しても、いつか崩壊してしまうのではないか。われわれは人間ですから、そこで人間として支えてくれるようなまち、それを誇りにできる。これは清瀬にしかできない教育になるのではないかと思います。渋谷市長、今までの議論を聞いていただいてのご意見などを。

(渋谷市長)

松尾芭蕉の「不易」と「流行」が浮かびました。それは人間が何を喜びとするか、何を基本として生きていくべきか。これをしっかりと押さえることが大事です。喜びを求める流行の部分、何を基本とし生きていくべきかの問いは不易の部分。このような立場になると、現場から離れて実感をなくしてしまいます。以前は幼稚園の現場で毎日子どもたちを抱き上げて、手応えがいっぱいありました。喜びが伝わってくる、困ったときも子どもたちと共に感じ合うことが出来ました。不易の部分を考えて時に、子どもたちに地域の力として実感させるのは、清瀬を誇り、愛する心というのは「自分の生きている場所は最高だ」と思う事、それが前に進める力に違いないし喜びを作っていると思います。

他人を認める、自分が認められる、意見を認める、考え方を認められる。何というかキャッチボールの相手がいて、自分の存在も認めて、向こうだってそういう存在が、仲間が必要だと思います。地に足がちゃんと着いていなければなりません。

(坂田教育長)

我々にも、子どもたちにも、愛する心というのが一番ベースになっていますね。同じフィールドの中で、共感をし合いながら作り上げていくということは、教育委員会として清瀬の子どもたちに身に付けさせたい力、もちろん国語の力も、算数の力も、社会の力も付けなければならないけれども、そのベースになる力というのは、「故郷清瀬を誇りとし愛する心」「自分で考え判断し行動する力」「学び続け成長し続ける力」と粕谷委員がおっしゃった「他者を思いやる心」をこういう形になるのかもしれないですね。構造を考えながら作っていきますが、これをベースにするということで、渋谷市長も共感いただけますか。

(渋谷市長)

いいですね。

(坂田教育長)

ありがとうございます。ではこれから清瀬の14校の子どもたちにこれをベースにして教育活動を続けます。

続いて論点の2、我々はどのような教育活動を行うべきかです。清瀬の誇るべき資源を使って学ぶ教育活動、ESD教育や起業家教育の活用は、国語の時間では難しいが社会科ならできる。単純な算数の時間での活用は難しいが、算数の知識があつてこそ起業家教育やキャッシュフローの計算が可能になる。地域の人たちと話し合いには国語の力が必要になるし、社

会科の力も必要だ。理科の力も必要になる。清瀬の資源を使ってこの力を育てる基本は変わらないですね。兵頭委員どうでしょうか。

(兵頭委員)

ESD 教育について、先ほどの動画にもありましたが、里山・食・太陽光など地域にあるものを生かして取り組んでいました。清瀬は自然も豊かで、地域にも協力団体や施設があります。それを生かして環境教育や人権教育、国際理解教育や防災教育、実際に様々な取り組みを各学校がやることも出来ます。ESD 教育というくくりの中で、今までの特色ある教育をより充実させて、市としてのカラーを打ち出すことができるのではと思います。

(坂田教育長)

今取り組んでいることを、ESD 教育という枠組みで見つめ直す。資質・能力を高めるためにやる、そのような考え方も可能だということですか。

(兵頭委員)

ESD 教育という枠組みの中で、より地域に目を向けて、新しいものを見つけ取り組んでいく、一つの視点として ESD 教育を推進するという方向性が決まるとしたら、案外やっていけないのではないのでしょうか。

(坂田教育長)

清明小学校では地域の伝統芸能を学んでいますが、注目したいのはお囃子をしているメンバーの役割が見て取れることです。国語や算数ができることが賢い時代ではなくなってきている前提で、お囃子の様子を見ていても通じるものがありますが、粕谷委員はいかがですか。

(粕谷委員)

メンバーの中に活発な子がいますね、よく集団でああやって盛り上げる子、目立つ子がいます。以前は何も考えずにやっているのかなと思っていました。いろいろな方の話を聞くと、盛り上げる必要があるとき、自分の本意じゃないけれども、場がもとめる役を意図的にしているそうです。それは先ほどの自分で考え判断する力ではありませんか。ここで自分がこうする必要があると判断して進んで行動する。そのように考えると、先ほどの下宿囃子に限らず、様々な状況を与えると、子どもたち自ら必要性を感じ状況を判断する能力が、自然と養われる機会になる可能性がありますね。

(坂田教育長)

動画になった松本の例でも、子どもたちは里山をあまり知らなかったと言っていました。清瀬の子供たちにも結核のこと知らないのかもしれない。ESD 教育で結核の勉強をすることで「故郷清瀬を誇りとし愛する心」ここに繋がっていくことは間違いないですね。今、

粕谷委員がおっしゃるように「自分で考え判断し行動する力」こっちにつながってくる可能性もありますね。

論点1で私たちが目指す清瀬の教育と、ESD教育の可能性の繋がりが見えてきたような気がしますが、土屋委員どうですか。

(土屋委員)

現在は科目や教科により縦割りになり、いわゆるたこぼ化、横串が刺さらないということが社会全体の課題としてあると思います。下宿囃子ですが、例えば、体育館だけで発表するのではなく、学校外の人も見られるような形や参加可能なものにするなど、清瀬市全体で持続可能な観点を持った教育を推し進めるといふとき、地域にもともとあるものを再発見し、新たに価値付けをしていくということが、重要でありかつ取り入れやすいのではないのでしょうか。

(坂田教育長)

土屋委員のお話からは、下宿囃子を学びながら、子どもが学ぶこと。もしかしたら清瀬の歴史を、もしかしたら清瀬の他の文化を、そこから医療という文化のことを、もしかしたら日本の中で、または世界の中で清瀬はどういう価値があるのかなど。俯瞰してものを見ながら、清瀬のことを振り返ることがあるかもしれないとお考えですか。

(土屋委員)

そうですね。相互的に作用するような形が取れるのかと。ESD教育の中にそういう価値がありそうです。

(坂田教育長)

ということはESDというのは一定程度価値があると。渋谷市長からはいかがですか。

(渋谷市長)

こんな話があって、将来気象予報士になりたい女の子がいました。NHKの天気予報が大好きで、校長先生がそれを知って、清瀬に気象衛星センターがあると教えてあげた。そうしたらその子は所長宛に手紙を出した。すると所長から、気象予報士になるにはこういう勉強をしないといいよと返事があったとのこと。これはまさに持続可能の実践です。その子の思いを学校が地域の資源に繋げ、その子自身が行動に移しています。

(坂田教育長)

共感とつながりの世界ですね。職務代理者。まとめていただけますか。

(宮川教育長職務代理者)

今までの教育行政はこういうことをやりましょう、ESDをやりましょうと進んでいました。しかし、教育的な価値の部分について校長先生方で議論し「うちの学校ではこれでいこう」となった時、ESDの8項目から成り立つのだと思います。教育行政の在り方、創造的で独創的であること、その学校らしさになっていく。そこに清瀬としての教育の姿ができていくのだと思います。

(土屋委員)

子どもの一生懸命な姿を知ると、大人の側にも活力が生まれますね。場づくりを行うことによって、さらに魅力が生まれてくるかもしれません。これまで、地域の価値、市町村の価値が高まる例をいくつか見てきているのですが、清瀬にはそういう資源がたくさんあると思います。それを共有できる一つの場が、何かお皿といいますか、大きなお皿がESD教育と考えられませんか。

(宮川教育長職務代理者)

まちの世話役がいるかどうかで、そのまちの活力が違う。笑いを作るというのもとても大事なことです。先の例にあった下宿囃子に親しむ中で、子どもたちが今度は自分たちの新しい笑い、昔の伝統を尊重しながらも、自分たちで自分たちの笑いの文化を作っていく。そういう所に創造力とか、継続する力とかというのが出てくると思います。

未来に向かう子どもたちや教育について二つ、2045年シンギュラリティの時代には、気象予報士などの仕事はなくなると想定されています。自分の必要な情報だけデータで見られるようになります。でもあえて大事な役割を持つ気象予報士の存在が必要になると考えます。テレビで今九州の天気はこうです、明日こうなりそうですと予測する時、視聴者が遠方にいる関係者の安否を気遣う、明日雨で困らないかと思いやる、想起させられるような語り生き残るのではと思います。

それからもう一つは、食糧問題、水の問題を子どもたちの時代から考えさせなくてはならない。子どもたちに、自分で考え、行動できる人間にする、小学校や中学校での学習内容もきちっと考えさせるけれども、本当にこれからの時代の中で、どんなことをきちんと自分で考えて、考えの経験を重ねていって、行動できるようにしていくかということを、清瀬の教育で目指す。他の自治体でやっていないことを、宣伝していくことによって、このまちの特色やさまざまな遺産を社会に知ってもらうことも大事です。それは市長が一生懸命なさっている。国の人口ビジョンによると2060年代は4割以上が高齢者になる。しかし清瀬はこれだけの資源があるから、それを生かした取組みをすれば、高齢化率を抑えられる社会になっていくのではないのでしょうか。学校教育で今やろうとしていることと、今市全体でやろうとしていることがマッチングしていけば、人口の問題、市の生き残りの問題にもなりません。是非渋谷市長に「このまちの教育は今頑張っているぞ」「もっとみんな目を向けて協力していきましょう」など、学校支援本部等がもっと軌道に乗るように協力をしていただけたらと思います。

(坂田教育長)

最後に渋谷市長にお話を伺いたいと思います。今、宮川教育長職務代理者がおっしゃったように、手前みそになりますが、清瀬は今、本当に頑張っていると思います。国語や算数、理科などの力はなかなか伸びませんが、卒業式を見るとその姿が分かる、学校の姿が分かるといわれるように、本当に子どもたちが自分で考えて、判断をして、賢い子どもたちに私はなっていると思うのです。先ほどのセヴァンさんのような子どもを育てていきたいと思っています。今日の議論を聞いていただいて、渋谷市長の思いを聞かせていただきたいと思いません。

(渋谷市長)

人生どうと言ったところで、人生 100 歳です、その中でも 93 歳でラジオ体操に来てくれる人、100 歳で尺八を吹いている人もいます。人生の大先輩がいてくれることが資源だと思います。子どもたちにとって余程大変換が起こらないかぎり、子どもたちも 100 歳までの命を生きる。子どもの時に大先輩から何か影響を受けることができると思います。

「清瀬讃歌」を参考にお話すると、四番に「やわらぎの 心が通う柳瀬川 桜並木よ しあわせを 分け合いながら 水鳥も翼を洗う 和のまち 夢のまち 好きだよ清瀬」とあります。ひとだけでなく生き物全体、大自然も一緒に幸せを分け合う感性を、星野哲郎さんが表現してくれています。とても大事なことで、忘れてはいけないことですね。

だから僕が常に思うのは、わずかな一歩でも必ず積み重ねていけば、いつか必ず芽が出る。自分自身のことになりますが、この三期目に入るに至っても、私は本物、真実に向かって進んできたつもりです。ですから、またこの役割を担うことになりました。

とにかく教育も逃げない、ごまかさない。そういうことがとても大事だと。それは時間がかかったりしますけれども、逃げちゃうのは偽物と思う。もちろん何でもかんでも踏み込んでいけば良いわけではないですけれども、真面目に対して不真面目じゃ駄目だけれど、真面目一本槍でも駄目だと。不真面目な部分も大事だということ、少しの揺れを、間を取るといことも大事なことです。清瀬にもそういう土壌の力があります。坂村真民さんの詩「忘れるな」を紹介させてください。「頭より足 足を忘れるな 花より根 根を忘れるな 見えるものより 見えないものを忘れるな」清瀬には人間を育てる根が、地域としてしっかりと張っていると信じています。

(坂田教育長)

ありがとうございます。今、渋谷市長にまとめていただいたような気持ちになったのだけれども、われわれがどう生きるべきかという話になったように感じます。子どもたちの議論をしながらも、われわれ大人が本当ならどう生きていくべきか、もう一回考えるべきだ、何かそういう会議になったような気がします。

今日の結論のまとめとして、清瀬の数限りないまさに根の張った資源を活用した教育を推

進していくということで、これはESDというか、起業家教育というようなこと、それともそれ以外の枠組みなのかという所をもう少しわれわれの中で議論をします。

清瀬の題材を、地域の題材を活用する。そして子どもたちに清瀬を誇りとし、愛する心を育み、他者を思いやる心と、それから自分で考え、判断し、行動する力、学び続け、成長し続ける力を育てていくという所を、今日の結論にしたいと思いますが、よろしいでしょうか。渋谷市長。これからまたこの進捗状況についてはご報告いたします。

(渋谷市長)

はい。皆さま、ありがとうございました。結局何回も言うように、前向きに、ここが一番、清瀬の総合教育会議ですから、ここで熱く語り合うことは、これはもう波動となって、大きな影響力がある。必ずいいものを生み出していくはずだと思っております。これからもよろしく申し上げます。

閉会

渋谷市長が閉会を宣言

午後3時5分 閉会